

生産性の改革!

自動化・デジタル化・リモート化の進行

新型コロナ禍による想定していない事態
既存事業のみではなく、印刷会社の特性を活かした
新たなビジネス展開を図る

Conversion



2019年12月に武漢で確認された新型コロナウイルスは、2020年を迎えると世界中にまん延し、人々の生活に多くの影響を与えました。感染拡大によって、企業の多くは売上高の急減や在宅勤務への対応など未曾有の試練に直面しています。

とりわけ、旅行関連業、飲食業・ブライダルなども含むイベント関連業は、きわめて大きなダメージを受けました。もちろん、印刷業界も例外ではありません。旅行・イベント関係の印刷物に加えて、巣ごもり消費で業績が好調だったスーパーマーケット・ホームセンターのチラシ印刷も大幅な減少となつています。その他の企業も集客を目的とした折込チラシなどの印刷広告を避け、Web広告への移行を進めることは、先行きの見通しが立たない状況では避けられなかったと言えるでしょう。

もはや、どのようなビジネスを語る上でも、新型コロナウイルスは切っても切れない関係にあります。2021年を迎え、ワクチン接種が始まったとしても、社会が元通りになるには相当の時間がかかるはず。これまで、緩やかに進んできた在宅勤務やリモートへの変革は、ここに来て急速に進んでいます。昨年のダイヤモンド新聞Vol.8では、少子高齢化・働き方改革による人手不足の問題に対して、省人化・スキルレスのシステムをご提案するといった視点で事例紹介を行いました。新型コロナウイルスにより、人の関与を減らす圧力は、今後ともあらゆる方面で強まるものと考えられます。

また、これまでの商習慣で無駄が多いと感じられていたものは、より効率化が追及され、引き続き自動化・デジタル化・リモート化が進み生産性改革が進んでいくことになるでしょう。関東地方の新型コロナウイルス感染者数は、東京など大都市圏では感染拡大がニュースになるものの、北関東エリアは比較的感染者が少なく、そのエリアの印刷需要に

及ぼす影響は、首都圏ほど顕著ではありません。つまり、ニーズそのものに大きな変化がない地域もあり、やり方次第では過去に失われた需要を掘り起こすことも不可能ではありません。一方で、印刷の現場でしか活用できない技術というのも一定数存在しており、通販関連印刷物など、巣ごもり需要でプラスとなつている分野もあります。

よりポジティブ思考の印刷会社は、自社の設備を利用して透明フィルムなどを製作しています。既存のやり方だけにこだわらず、印刷会社が持つリソースを活かした新たなビジネス展開が業界全体で求められているのです。

新型コロナウイルスは、すべての業種・職種に対して大きな影響をもたらした一方で、新たなビジネスチャンスも生み出しました。2021年も昨年に引き続き、どれだけ世の変容に順応し、新しいニーズを取り込めたかによって得られる成果が大きく変わるでしょう。

ダイヤモンドでは、このような印刷業界全体の大きな変化に伴い、果敢に挑戦する皆さまの一助となるべく、新たな課題を共有しつつ、解決に向けた最適なソリューションを引き続きご提案いたします。

既存業務に忙殺されていた時より、立ち止まり考える時間に余裕がある今こそ新たな事業の種を見つけてみましょう。今号発行に伴う取材の中でも、コロナ禍で営業停止・社員の休業を余儀なくされたものの、余った時

コロナの時代こそ新しい世界を切り開け!
ダイヤモンドはコロナ禍における懸案事項の新たなソリューションをご提案します。

VS コロナ

ダイヤモンドの取り組み

<p>除菌・消毒 安心の日本製</p> <h3>アルコール除菌液</h3> <p>除菌後スッキリタイプ アルコール除菌液「pure Leaf」 植物由来エタノール70%以上含有</p> <p>手指にやさしいシットリタイプ アルコール除菌液「pure Leafセーフ」 植物由来エタノール61%含有</p> <p>内容量 スプレーボトル (400ml) つめかえボトル (400ml)</p>	<p>飛沫感染対策</p> <h3>組立式机上パーテーション</h3> <p>耐水性、耐アルコール性のある ラミ紙ボード (紙と樹脂の積層板) を使用</p>	<p>食品にもつかえる</p> <h3>抗菌紙</h3> <p>抗菌クラフト紙 FSC認証-MX</p> <p>三菱抗菌板紙</p>
---	---	--

このデジタル印刷新聞は、中日新聞社様のご協力を頂き、東京機械製作所製 インクジェット方式デジタル印刷機:JET LEADER1500、三菱製紙製産業用インクジェット用紙:三菱IJフォーム PD-W (81.4g/m²)にて、作成しております。

ユーザー会社レポート

完全無処理の体制
を目指して

ハイコーパック
東京都台東区
CTPシステム: TRENDSETTER Q800 AL
完全無処理CTPプレート: SONORA CX2
オフセット印刷の
可能性を広げたい!



代表取締役社長
鈴木 健夫氏

ハイコーパック株式会社は、包装用品・店舗用品・文具の総合商社である株式会社シモジマ(東証一部上場)の包装紙・紙袋など主に紙製品部門の製造を請負うグループ最大の工場として、紙袋・包装紙等を製造する。創業は1963年、1965年に前身のスズキニール工業所を設立。そして1980年にシモジマの工場閉鎖とともに設備の一部と人員を含めて合併し、シモジマの専属工場として現在の会社名となった。ちなみに、ハイコーという名称はシモジマの登録商標・ブランド名である。資本金8,000万円。2019年度の売上はおよそ22億円。社員数は役員・社員・パート社員合わせて170名。障がい者雇用についても長い実績があり、新しく市貝工場を立ち上げる際には採用人数を増やすなどの英断も行った。

完全無処理化と
オフセット印刷の
効率化を実現する

近年、品質向上・多品種小ロット生産に注力しており、付加価値の高い商品作りを目指す一方で、協調性を重視しつつ穏やかで明るい社風を目指して、社員教育・環境整備の面で体制強化に取り組む。もともと、製造した商品のほとんどをシモジマに納める形だったが、時代の変化に伴い他の取引先の開拓にも着手するようになり、今年参加したギフトショーでは抗菌用紙を使った自社オリジナル新製品の展示によって強い存在感を放つ。現在は、シモジマで取り扱っている紙袋の既製品並びにユーザーの特注品の他に新規開発商品の拡販を積極的に推し進めている。

CTP機器の更新を控えていた時期、無処理版を使用できるモデルに興味を持ったことで、ダイヤモンドを通じてTRENDSETTER Q800 AL導入の運びとなった。完全無処理CTPプレート「SONORA CX2」との組み合わせによって、自動現像機・処理液やそれに伴う維持費・人件費が不要になり、コストダウンと業務効率化・環境負荷の軽減につながるメリットを享受できると考えた。

導入を決断した代表取締役の鈴木社長は「もともとはフレキシ印刷がメインで当社におけるオフセット印刷の割合自体は10%ほど、オフセット印刷のCTP化は品質向上、納期対応など諸々の問題を解決するには自前でやらなければならない」と決意し取り組んだ。」と経緯を語る。

ハイコーパックにおけるフレキシ印刷での製版は協力会社による外注だったため、環境問題に気を遣う必要はなかったが、オフセット印刷では刷版工程のCTPで自動現像機を使っていたため現像処理と廃液処理が必要だった。TRENDSETTER Q800 ALと完全プロセスプレートSONORA CX2導入により、CTP工程が無処理化されケミカルレスが実現した。



営業部製作グループ
渡邊 翔 氏

実際に作業に携わるオペレーターの評価も上々で、渡邊オペレーターは「SONORA CX2になって、現像工程がなくなり、出力した版をそのまま印刷機にかけるこ

とができるようになり作業が効率的になった。」と話す。また、ハイコーパックでは製作用の部屋が手狭になり、新工場が建つたことをきっかけとして、出力指示とRIP処理を市貝工場(市貝町)、CTP出力を本社工場(芳賀町)とし、リモートでのプレート出力を行っている。



「三菱製紙製ワークフローRIP、DIALLIBRE IIIにより遠隔操作での作業を効率的にできるようになり、入稿データの確認・RIP後データの再確認を市貝工場のDTP側、TRENDSETTER出力後の刷版上での目視確認をオフセット印刷機がある本社工場側といった形で段取り良くチェックを進められている。」と話す。以前使用していたモデルと比較すると、現像薬品を使用しない刷版でおおかつ視認性も良いので、メンテナンス・廃液処理など現状することにより発生する負荷が軽減され確認作業も支障なく出来ているとのこと。クライアントの要求する細かいところをどこまで表現できるかというところが今後の課題となるが、現場では使いやすいと作業効率の面でプラスに働いたと評価している。ほとんどDTP側で操作ができ、作業の効率が良くなったことに満足しているようだ。

新型コロナウイルスの
影響を受け、
オフセット印刷を強化

ハイコーパックでも新型コ

ロナウイルスの影響は避けられず、各種イベント予算がストップするなど直撃を受けた。紙袋などの主要製品は、土産物屋・駅中・デパート・アパレルといった比較的影響・落ち込みが大きい場所が必要とされているため、それぞれの売上が減少するにつれて包装される機会も減ってしまう。

プラスチック製のレジ袋が7月1日から有料化されるなど、楽観視できる要素もあつた。新しい選択肢の一つとして紙袋のニーズが生じると考えられたからだ。

しかし、結局のところ紙袋もまた有料化となつてしまふ、軽包装の業界全体で想定していなかった方向に物事が進んでしまつていく。

この点において鈴木社長は「将来的にはプラスチックが使用禁止となつていく海外の国々に向けて輸出する形になるだろう」と予想している。実際に打診された例もあり、特にアメリカの需要は大きいとされる。

また、ハイコーパックで出荷している紙袋のニーズも変化しており、手提げ袋はコロナ禍以前と比べて3割・4割減となつているが、逆に持ち手のついていない袋は3割・4割増となつている。

鈴木社長はこの点に注目しており、「デパートなどで一定の需要もあるし、イベントなどで手の付いていない紙袋は有利。袋自体の消費量が少なくなり、小ロットでの注文が発生する状況が生まれたとき、オフセットの活かし様がある。」と語る。今年ギフトショーに参加した際も、商材

が抗菌用紙を用いた紙袋という点もあり注目を集めた。技術面では抗菌紙に印刷するとその部分の抗菌性をインキが邪魔してしまつたため、裏側から透ける印刷を試みている。依り組形状の丸ヒモ取っ手を作るメーカーも抗菌仕様を用意しており、宅配便の袋に抗菌性を持たせるなど多くの人が触れる物に訴求していくことで手こたえを感じたとのこと。コロナ禍の時代、新しい試みが各メーカーで次々にスタートするのに合わせて動きをかける構えだ。



鈴木社長曰く、この抗菌用紙製の紙袋には、ちょっとしたエピソードがあるそうだ。「原紙は三菱製紙に新製品の抗菌クラフト紙を頼んだが、展示会の前日になってようやく紙袋用に使える厚手のものができた。だから前日に原紙をもらつて、夕方に作つて、展示会場に当日の朝持ち込んだ。」と感慨深そうに語つてくれた。

あえて
「多くを作らない」
提案が未来につながる

「今までは持ち手のある手提げ袋がメイン商品となつてきたが、今後は宅配用など手付け以外のニーズへの舵取りが必要になる。今の状態から10年後を見据えて会社の体制を作つていかなければならぬ。自分たちが得意としてきたところは次第に通じなくなつてくるし、営業

の幅を広げたい。」と鈴木社長は話す。オフセットの強化を目的にTRENDSETTER Q800 ALを導入したハイコーパックだが、その強みはオフセットのみならずグラビア・フレキシと幅広く、それらを組み合わせた提案もできる。紙袋も50年の実績があり、工程の改善により工夫を重ねてきた製袋スピードは特筆ものであり、様々なニーズに対応できるため、「展示会への出席を増やし、自社サイトの内容を充実させることで、そこを強みとしてアピールしていきたい」と鈴木社長は語る。

逆境でもひるむことのない鈴木社長の心には、一つの経営哲学がある。それは「どんなジャンルであっても、その中にある技術を深めていくことで、ニーズにあつたものが作れるようになる」というもの。最近の例で言えば、すぐに売上につながるわけではないものの、オリジナル・1枚ものの袋を用意することで、新たなニーズを掘り起こしたケースがある。

デジタル化が進む現代において、紙袋の品質にこだわることでも「袋屋・駄物屋」としては良い傾向」ということで、オンデマンドを採用する追い風になつたと謙遜する。フレキシ、オフセット、オンデマンドと様々な印刷方式と加工ノウハウで顧客ニーズに添えていく体制と提案力をあわせ持つハイコーパック、社長の表情には、これまでの仕事で培ってきた自信が確かにみえがっていた。



「お祭りで絵を描くイベントがあり、一等賞の方に袋を景品として差し上げたら大変喜んでくれた。それが縁で、学校の卒業式で全校生徒に同じものを配りたいという依頼が来た。」

一つの小さな仕事か、大きな仕事に発展した瞬間である。業界の中でトップクラスの印刷を実践してきたハイコーパックには、印刷技術を磨いて

ハイコーパック株式会社 Company Profile

代表者: 鈴木 健夫
〒321-3304
栃木県芳賀郡芳賀町祖母井
1702-1
TEL 028-677-0214
FAX: 028-677-3628
http://heikopac.co.jp

きたことで培われた「提案力」という強みがある。「過去の提案方式は、フレキシで最低1万枚・2万枚にすればもつと安くなる、といった大口のもの主流だった。でも、これからの時代、そんな枚数は1年ないし使い切れない。そこで、在庫負担を減らすためにオフセット、オンデマンドで1000枚、5000枚でどうですか」と提案するものも一つだと思ふ。そういう目線から考えていくと、極小ロットへの対応も、技術の進化やニーズに合わせて印刷方式を見直し、フレキシではなくオフセット、オンデマンドを採用するなどアイデアが出る。」と、あえて「多くを作らない」形での提案をすることが、今後生き残るために必要と話す。デジタル化が進む現代において、紙袋の品質にこだわることでも「袋屋・駄物屋」としては良い傾向」ということで、オンデマンドを採用する追い風になつたと謙遜する。フレキシ、オフセット、オンデマンドと様々な印刷方式と加工ノウハウで顧客ニーズに添えていく体制と提案力をあわせ持つハイコーパック、社長の表情には、これまでの仕事で培ってきた自信が確かにみえがっていた。

ユーザー会社レポート

株式会社サカイ・シルクスクリーンは、1984年9月に設立された福井県吉田郡永平寺町の社員数20名のサイン製造会社である。東京都北区にも営業所があり、所員は1名と少数。しかし、東京発の仕事の割合は増加傾向にあり、都内を中心に駅名表を多数手がけている。すでに西日本圏内では多数の実績がある。松田総務部長は「日本が東京オリピックを控えていた関係で、仕事の面でよい影響が出た」と分析している。

納品先も幅広く、都道府県の各自自治体・公共施設・地下鉄や電車の駅に配置される構内案内図から、喫茶店のメニューサイン、老人ホームのお風呂場の滑り止めマットなど多岐に渡る。高い技術力を示す商品の一つとして、耐蝕性のあるステンレス鋼材に糊をかけた後、焼き固めて作られたステンレスホーローサイン・サスマック・ノアが知られる。半永久的に形状・色彩を保持できるという驚きのパフォーマンスを実現しており、雨だけでなく雪・紫外線・風・さらには温泉観光地など硫黄の影響が強い場所までカバーしてくれる高い耐久性を誇る。

TDP1750によるコストカット効果は非常に大きい

サカイ・シルクスクリーンで新たに導入したTDP1750は、菊半裁対応の完全プロセスシステムの出力量も使用しないため、廃液が発生せず環境面で負荷が少ないのが特徴。処理剤を使用しない分、日々のメンテナンスに時間が掛からないのもメリットの一つ。長尺オプシオンを使用すれば製板フィルムの大尺出力もできる。

導入の理由について「20年以上使用していたイメージセッターの不具合が増え始め修理しようにも部品がない状況となっていた。壊れて動かなくなれば会社として致命的なダメージを受けるおそれがあり、代わりにするものを探していた」と松田総務部長は話す。導入に際して失敗は許されなかったため、2019年の11、12月頃からテストを始め、3ヶ月実際の仕事で製品つくりを使用した上で正式に採用の運びとなった。

半永久的に使えるサイン



総務部長 松田氏

デザイン・データ制作課長 天谷氏

サカイシルクスクリーン
福井県吉田郡永平寺町
完全プロセスレスCTP: TDP-750

高い技術を新しい分野に活かす

他社のドライフィルムセッターにも注目していた。ただ「機器価格が高価で出力サイズも小さく、本体だけでなくランニングコストも高い



「コロナ禍で生まれた「アウトドア製品」という新しい発想」

サカイ・シルクスクリーンでも、コロナの影響は避けられなかった。受注している仕事の多くは公共サイン・鉄道会社など大手企業のものが多かったが、それらの発注が止まってしまった。公共施設

ため、実用性を考えると現実的ではない。」と判断した結果、TDP1750の導入を決定した。

松田総務部長は「イメージセッターが安く、他社のドライフィルムセッターの半分以下。ランニングコストも今までと変わらないため、コスト面でのメリットが大きかった。設置面積もコンパクトで、しかも長尺出力ができるのは驚きの一言。」とメリットを強調する。



コロナ関連の対策グッズについては、コロナ対策用の床シートなどを用意しているが、やはり需要が一定数ある。一方で単価自体はそこまで高いものではないので、アウトドア製品の開発に比べてインパクトは

などは来年度の予算にも影響が出ており、仕事の発注自体が止まってしまいうりすくが考えられる。今年の段階で少なからず影響が出ており、来年はそれが大きくなるものと予想されるため、会社としても新しい動きをかけている。

その一つが「アウトドア製品」の開発・製造。事業内容から考えると意外な選択だが、シルクスクリーン印刷の様々な加工を行っているため、金属やプラスチックの加工にも対応できることから、実際に製品を作ってみようという流れになった。松田総務部長は「もともと手掛けている案内図などは印刷技術も含まれたモノ作りであり、一からすべてを作る工程の製品は珍しくない。一部外注する部品もあるが、基本的には枠から何から全部作ってしまう。今ある技術を水平思考すること、アウトドア製品という回答に行きついたことは、会社の活性化につながっている。」と発想に至った経緯を説明する。

薄い。ソロキャンブームが流行り始め焚火台を作ってみてはどの社員の意見が採用されたアウトドア製品の開発が始まった。同じくコロナ関係では昨今人気の抗菌処理に関しては「アウハウがある商品もある。」と意欲を見せる。

ノウハウを生む社風の背景にあるもの

サカイ・シルクスクリーンが手掛けてきたものは多岐にわたるが、それを支えているのは長年の仕事で培われたノウハウ。冒頭で紹介したサスマック・ノアは、ホーロー板にプリントする技術の特許を取得している。

サカイ・シルクスクリーンのもう一つの財産は、新たな発想・技術・ノウハウを生む独特の「社風」だ。

コロナ禍で受注が止まってしまったとはいえ、将来的に期待できそうな要素も十分あると松田総務部長は考えている。

「延期されたオリンピックが予定通り開催されると決まれば、止まっていたものが一気に動き出すだろう。コロナ過でも駅名表・運賃表などは中身が全部違い、受注後はダイヤ改正日が決まっているため納期に追われる。一つひとつ手作業となるため作業は大変だが嬉しい悲鳴。毎年一回でも駅ができれば、情報が全部変更となるケースがほとんどで路線全駅の路線図、運賃表が刷新されることから、ニーズは常に一定数存在している。」と展望を語る。

株式会社 サカイ・シルクスクリーン Company Profile

代表者：谷口 祥治
〒910-1135
福井県吉田郡永平寺町
松岡室 26-3
TEL: 0776-61-6336
FAX: 0776-61-6850
<http://www.susnoaa.com>



「コロナ禍以前から飲み会が少なかった」という社風が構築されたのは、車通勤の社員が多いという事情もあるが、「ミーティングで意識・意見を共有できていることも一因」「社員がもともと専門知識を持っていない分野であっても、都度調べながら知識を積み重ねてきたからこそ、アウトドア製品の開発に着手できた。」と松田総務部長は考えている。

「少数精鋭の体制でモノを一から作る経験が豊富なため、いっしょに社員の思い付きを実際に形にして作ることに寛容な社風が構築された。」クリエティブな思考と材料費だけで様々なことを試せる、サカイ・シルクスクリーンの恵まれた環境は、コロナ後の世界における大きな発展を予感させた。

ユーザー会社レポート



エイトプリント
神奈川県川崎市
水で製版する
B2判フレキシブルCTP:VDP-CF3070

**まるで自社仕様のよう
使いやすさ**

**VDP-CF3070で
コロナ禍の新たなニーズに対応**

川崎市高津区溝口に工場を構える有限会社エイトプリントは、昭和56年の創業以来、商業印刷全般を請け負ってきた。現在の主軸は、塾のテキスト・テスト用紙など学習関係の印刷。関東圏での営業が主だが、福岡など遠方の取引先とやり取りが発生することも多い。

社員数は8名で、不定期のパート・アルバイトを採用することで、繁忙期にも柔軟に対応する。古くからのダイヤモンドユーザーであり、担当者やサポート体制への信頼も厚い。

VDP-CF3070 概要と選んだ理由

エイトプリントが三菱製紙製のCTPを使い始めたのは11年前、FREDDIAの登場がきっかけ。省スペース化と四裁・半裁の両方が出せること、時間20版以上出力できることなどが条件だったが、FREDDIAはそれらいずれの条件も満たしていた。あまりにも自社のニーズに合致していたことから、代表取締役の橋爪社長は「まるで自社仕様のような扱いややすさだった」と高評価だった。

しかし、優良機種とはいえ経年劣化は避けられず、VDP-CF3070への交換を検討・導入の運びとなった。橋爪社長は導入の決め手に

する父兄のニーズを汲んだ学習塾が、オンライン等で授業を行っていたのだ。授業が行われれば、当然ながらプリント・テキスト等も必要になってくる。大手学習塾は子供たちを一つの場所に集められないことから、個人宅に教育に必要な印刷物を送り、好きな時間にテストを受けられるような仕組みを作った。



「FREDDIAでできることのほとんどが機能的に網羅されている上で、現像薬品が不要なケミカルレスモデルだった」と語る。印刷工場は準工業地域に立地しているが、周囲は住宅地という点もあって、身体に悪影響を及ぼす薬品を使用していないとアピールできるのはアドバンテージだ。

橋爪社長は導入にあたり、周囲の意見を聞くことも忘れなかった。仲間内でVDPを導入しているところ、足を運び、実際に版を出力し、印刷を行い、違和感がないことを確認している。ベースが白地になったことで検版も容易になったという利点にも気付けたという。

コロナ禍でも教育関係のニーズは安定

大きな設備投資をしたところで、今年コロナショックに見舞われたエイトプリントでは、6月には売上が大幅に減少した。しかし、幸いにして会社をたたくほどの大きなダメージは受けず、済み、4月から着工した新しい工場も9月には出来上がった。

ダメージを低減できた理由の一つは「教育関係の印刷に携わっていたこと。学校が休校になったことで、子供たちの学力低下を心配

れる体制が整っている。特に、発送作業はスタッフ全員でやるケースも珍しいことはない。結果的にスタッフ全員が多能工化している。

仲間うちでの仕事を助けることもある。業界そのものが助け合いで成り立っている一面は否めないが、それでも繁忙期のサポートができる会社はそう多くない。工場建て替えに伴い、自社生産ができなかった時も、事前に連絡しておいた他社との提携により、外注対応が可能となった。



ただ、多くの印刷業者は印刷までではなく、その後印刷物を配送することはできない。エイトプリントは学習塾など教育業界と深く関わってきたノウハウがあることから、データ製作、印刷、印刷後加工、製本、発送までの全工程を一社で完結できる強みがある。エイトプリントで配送業務をうたい始めたのは比較的最近だが、それ以前から積み上げてきた実績がコロナ禍であらためて評価された形だ。

社員の多能工化と人の縁に助けられて

データ製作から配送までを手掛けられる仕組みは多くの人が連携することで成り立っている。エイトプリントの顧客側で配送業者と契約している場合、顧客に指定された配送業者に納品するなど、複数のケースに応じて対応方法が変わる。ただ、配送担当・専属者を設けるような形はとっていない。

少数精鋭体制のエイトプリントは、社員一人ひとりが行う作業の幅が広く、誰かが抜けた穴を他の誰かが埋め

有限会社 エイトプリント Company Profile

代表者：橋爪 傑
〒213-0001
神奈川県川崎市高津区溝口
6丁目16-25
TEL: 044-844-4344
FAX: 044-844-4303

1977年8月・東京都新宿区山吹町に設立された株式会社ハナミは、「販促応援をコアブランドとする販促ツール全般を取り扱っており、商品構成はサインディスプレイ・オンデマンド・オフセットと幅広い品揃え。年商7億円の事業規模を誇り、従業員数は38名と層が厚く、パート社員を含めると40人を超える。

ポスター・冊子・パンフレットなどのラインナップに加え、紙製抗菌マスクケースのようなコロナ禍に対応した新しい商品も人気だ。

「オンデマンド豆本の需要は多く、1日中仕事は途切れなため重宝している」と生井部長はメリットを語る。

「短納期・小ロットと」と話したことがきっかけだ。「当時は豆本を通販サイトで売り出そうと考えていた時期で、喉元までしつかり開けるもの・糊交換の回数が少なく済むものを探していた。社長も私も同じ機械に興味を持ち、実機を確認したうえで、導入を決めた。」

短納期・小ロットというスタンスを支えるPUR-430

短納期・オンデマンド印刷が売りのハナミにとって、機器とロットとのマッチングは重要な問題だった。人気商品の「豆本」は、A7・B7サイズなどのミニ冊子で、製品力タログ、ギフトカタログなど幅広い用途がある。同人誌・コミックマーケットでは「小さくてかわいい」と重宝され、ビジネスシーンでは就業規則・応対マニュアルにも用いられる。多様な用途から、薄いものは20ページ・厚いものは100ページ以上にわたることも珍しくない。

一方、新しい試みが成功した例もある。営業担当者がZoom・Skypeを使って遠隔の打ち合わせ体制を整えたことで、一部落ち込みが減らせたとの報告もあった。インターネットを使った営業活動が功を奏し、より広範囲への営業が実現した形だ。そういった事情もあってか、11月は「良いスタートダッシュが切れた」と生井部長は話す。

「休業時も、完全に稼働を止めていたわけではなかった。商品開発の時間を設け、社員一丸となって新商品の企画・製作に取り組んだ。社員と話し合う機会が新たに増えたのは、ある意味ではメリットだったように思う。」

生井部長の眼差しからは、コロナ禍という不測の事態をにらみつつも、ハナミに縁成すたくさんの方々をおもひばかる優しさが感じられた。

業界最速納期を実現!

ハナミ
東京都新宿区
ポストプレス:
無線綴じ製本機 PUR-430

短納期・小ロット体制を支えるPUR-430

概要と選んだ理由

PUR-430は、PUR糊を使用したオンデマンド対応の無線綴じ製本機である。ページの開きの良さ・耐久性に優れ、通常PUR糊は使用1回で交換となるが、PUR430は密閉型押し出し方式により糊交換は4週間に1回となっており、小ロット多品種に最適なモデルだ。

ハナミでPUR430を導入したのは、およそ4年前の2016年。代表取締役の矢部社長・生産管理部の生井部長が、とある展示会で見かけたことから興味を持ち、それが取引先の商社に「ぜひ力

「会社立ち上げ以来、ずっと人の縁に助けられてきた。いくら技術が進歩したとしても、人と人の縁を大切にしたい。ダイヤモンドさんとの縁も、本場に大切なものだと思っている。」

そう話す橋爪社長の笑顔には、人を強く惹きつける魅力が確かにあった。

実際に2年以上PUR430を使い続けるオペレーターからは、混んでいる状況だと1日に300〜400冊、豆本の場合1案件で2、000冊を手掛けることもあった。製本機は糊の交換がネックだったが、PUR430に切り替えたことで楽になった。当社の交換スパンは1週間だが、糊を抜く予定日を決めておき、前日に電源を落とすという「翌日には抜けるので手間がかからない」と喜びの声を聞いた。

株式会社 ハナミ Company Profile

代表者：矢部 敏夫
〒162-0801
東京都新宿区山吹町 333
カーネ早稲田
TEL: 03-3267-8791
FAX: 03-3267-8792
http://www.hanami.co.jp

ユーザー会社レポート



和歌山県御坊市の

「おもろい」印刷所

隆文社印刷所

和歌山県御坊市
四六半裁サーマルプレートセッター: MADIATH
A3縦サーマルディジプレートCTP: TDP-324II

印刷業界の保守性を
ぶっ壊す!

有限会社隆文社印刷所は、1884年(明治17年)に創業された和歌山県御坊市に所在する印刷会社である。和歌山で長年実績と信頼を積み上げてきた老舗であり、年商は1億円規模、2020年現在で130年以上の歴史を誇る。相談・見積もりから製品提供まで1社で完結できる、和歌山の総合印刷会社として強い存在感を放つ印刷所の一つ。

主な営業内容としては、チラシ・パンフレット・カタログなどの商業印刷全般と、名刺・封筒・伝票など事務用印刷全般。その他、大型ポスター・選挙用印刷物・カード・チケット・シールなど多種多様な商品を手がける。官公庁との取引や広報誌・冊子の発注も多く、従業員7名の精鋭体制で対応している。

取扱商品について、1アイ

テムの選択肢の幅が広いのも特徴。名刺を例にとると、社員の似顔絵が描かれた「似顔絵名刺」・名刺の中に盛り込またい情報を増やせる「二つ折り名刺」・完全オリジナルデザインを実現できる「ビジネス名刺」など、非常にユニークなデザインを取り入れている。

選挙など特殊なケースにおいても、ポスター・リーフレット・推薦状(立候補)ハガキ・選挙用名刺などを揃え、選挙出馬応援パックのようなニーズを押さえたパッケージ商品も人気。

他には、Tシャツ・看板などの受注も行っており、印刷というジャンルであれば通りのことを可能にするノウハウを持つ。多くのジャンルを網羅している「多くのジャンルを就活中の学生が遠方から面接に訪れるほどの知名度だ。」

MADIATH TDP-324IIの概要と選んだ理由

新たに隆文社印刷所が導入したMADIATH TDP-324II(マディアス)は、ファイバーレーザーダイオード露光ヘッド搭載の四六半裁サーマルプレートセッター。最新の安定した露光性能を有し、高品質な印刷が可能となった。

隆文社印刷所に導入されたのは2020年9月のことで、4色機用として15年ほど使用していたが、次第に不調が目立つようになり、高耐刷のアルミプレート無処理版TGP1e(イプシロン)に対応したMADIATHへの入れ替えを決めた。田淵専務取締役が当初懸念していたのはプレートのコスト面だったが、実際に導入を検討する時点でこれまでの古い機械で出力したプレートに比べ品質の良い刷版が得られ、多少のコスト差をカバーできる。」と判断。導入に踏み切った。

同時期に、同じく単色用としてTDP-1324IIを導入しており、こちらもやはり現像処理・廃液処理が無いモデルの選択となった。ピクマスタからの入れ替えとなった理由は現像工程があると清掃の手間がかかりメンテナンスが不十分だと版にも影響が出る。「トナー・インクを使用しないサーマルディジプレートTDP-1324IIへ移行した現在はメンテナンスからほぼ解放



A3縦サーマルディジプレートCTP TDP-324II

MADIATHの長所として、田淵専務は「インナーパンチの精度が高く、ケミカルレス」な点をあげている。MADIATHを導入する前までは、さすがに古い機種だったこともあって、廃液処理・水温調整・薬品調整・清掃作業など、メンテナンスに時間と手間がかかっていた。

夏場はクーラーを入れていても他の機械から出る熱によつて温度調整が難しく、液温が30℃を超えたらエラーが出てしまうような状態だった。そういった事情もあって、更新は時間の問題だったと言える。ネットプリントとの差別化という意味では「納期・品質ともに満足できる水準にある。価格だけで見れば絶対にかなわないが、知識やデザイン力という点で強みを発揮できる。MADIATHは操作もかんたんで、複数人のスタッフが機械を操作できる体制が整った。」とスペックを評価する。

攻めの経営による新事業への投資

放された。」と語る。MADIATHと共通しているポイントとしては、やはり廃液処理の手間が省けること。作業時間がその分短縮されることなどがあげられる。スキルに係らず誰でもオペレーションができる点も、雇用する側として魅力的だと田淵専務は語る。

短期間で一気に新機種を導入できたのは、ものづくり補助金の申請に通ったことが大きかった。補助金の申請は、年々競争率が高くなる傾向にあり、誰でもすんなりと申請が通るわけではない。単純に「印刷機の劣化による買い替え」という中身では無く、新事業への展開・作業時間短縮・品質向上・人員不足など要素を盛り込んだ計画を立てようやく採択される。

「看板をやる」と思っていた時、展示会でTシャツを見て、「デザインを派生させれば自社でもできると判断した。自分自身、ウェアに興味があったというのに関係していると思う。ただ、実際にやってみるとどうしてもコストがかかる。カッティングなど工程も多いので、一連の流れのうち短縮できる部分が見つかれば、作業時間も減って利益が出る。現代のモデルは一番前のモデルと比べてスピードが速く、小ロットでやっても利益が

出るようになった。」



専務取締役 田淵 諭氏

このような姿勢を見せていると、社員のやる気にも火が付く。Tシャツに関しては、「近場でやっている企業がほとんどいないため、競争が激化していない分有利となっている。」

印刷というジャンルの中で、多数の仕事を自己完結できるノウハウがあることから、顧客も「隆文社印刷所に任せておけば大丈夫」と信頼する。例えばカフェを始めたら、名刺・チラシ・看板・ユニフォームTシャツと、必要なものをワンパッケージで手に入れられるのだ。

印刷物だけを生業にしている企業の中には、コロナ禍で月の半分を稼働させているのはいでいるところもある。そのようなタイミングでも看板の仕事があったので、結果的に隆文社印刷所では社員を休ませずに済んだという。

このような柔軟な対応を実現させているのは、田淵専務の好奇心も一因にある。別の表現をすれば「相談されたら断れない人の良さとも言えるかもしれない。地域密着型で商売を続ける中でお客様から相談されたら、田淵専務は「すぐに『できない』とは言えない。何かできる方法を探らないか」と考えて行動に移す。隆文社印刷所の強みは、このようなスタンスにあるのだ。

とにかく「おもろい」ものを作る

印刷業界のニーズを減少させた一因である「パソコン

インターネット」への危機感について、田淵専務は以下のように語る。

「印刷ニーズ減少の流れは止まらない。小中学生がパソコンに触れる機会も多くなるし、安いインターネット経由での発注は増えていくだろう。ただ、ネットの力を借りようと思うと大手が得するばかりで、店を出す側は大変。」

結局のところ「おもろいものを発信できるかどうか」が、生き残りには重要と話す。

5〜6メートルある、目立つ自社看板も立てた。印刷屋がわざわざそんな看板を立てたことで、周囲も「あれおもろいな。」「ようあんな立ってたな」と驚いた。この点について田淵専務は「儲けることも大事だが、何か驚かせてやろうと思ったなら度外視でやることもある。」と話す。



動画編集にも携わっており、結婚式の20年前の写真を集めてスキャンして動画に取り込んだり、子どもが通う野球少年団の卒団式にサプライズで動画を用意したりと、誰かを驚かせることに力を注いでいた。いつしか、それが評判になって「お金を払うからやって欲しい」と声がかかるようになった。現段階では商売にしているが、田淵専務は「商売にしたらモチベーションが上がる

かも」とやはり前向きだ。コロナショックのような経営危機が起こると、企業は保守的になりがちである。しかし、隆文社印刷所にはそのような考えはない。田淵専務は「人と一緒に働く」と話す。とどまるがそのような積極的な姿勢が多くの人に希望を与えているのも事実だ。



デザイナー 由良 有希恵氏

社員にもその勢いは伝播しているようで、デザイナーとして働く由良さんは「みんな喜んでいただけたら、作る側としてモチベーションも上がるし、専務が引っ張ってくれるのでやる気も出る。」と話す。

田淵専務を見ていると、「おもろい」ものを作ろうとする気概は、地元のみならず、日本の未来さえ良い方向へと導いてくれるのではないかと「そう思わせてくれるのが印象的だった。」

有限会社 隆文社印刷所 Company Profile

代表者: 田淵 恭一
〒644-0002
和歌山県和歌山県御坊市菌 512-1
TEL: 0738-22-0115
FAX: 0738-23-3805
http://www.ryubunsha.com

ユーザー会社レポート

有限会社三共印刷所は、1966年2月に創業した福島県福島市松木町の印刷会社である。商業印刷の傍ら、東京都港区にある営業所では主にデザインを請け負っている。

人がいて・モノが生まれて・そしてコトを起こすという人間の営みに着目し、印刷を通して「お客さまの生活文化の創造をお手伝いする」とが信条。

コロナ禍においても古くか

はもろろん経営も含まれる多忙さだ。社長は主に港区で営業・デザインを兼任しており、一人が担う役割がたかさんある。

業務の流れとしては、港区でデザインしたものを福島で印刷するというケースが多い。井上専務は福島の守りを固めている形だ。チラシ・伝票など、町中の商業印刷に関する仕事を請け負うことがほとんどだが、レーザー機を使用することで、木・ア



三共印刷所
福島県福島市
B2判フレキシブルCTP: FREDDIA Eco W
フレディアエコワイド

**3代にわたり
連続と受け継がれる系譜**

**「変なものを
カタチにしたい
ニーズに応える**

ら連続と続く顧客との信頼関係を保っており、誠意を持って多種少量のニーズに応えられる体制を目指す。社長は先々代から数えて3代目で、ヒトとヒトを繋げる会社として地元の信頼も厚い。

少数精鋭の体制が整って、スタッフは複数の作業を兼務することが多い。井上専務の仕事も「営業兼デザイン兼製作・製版兼工程管理」と実に幅広く、その中に

ルミなど紙以外の商品ラインアップを増やしている。詳しくは後述するが、大喜利印刷という企画の中で、余り紙・廃材を使用した製品を作るなど、エコの観点からも優れた取り組みにチャレンジしている。

**フレディアエコワイド
が効率化に
大きく貢献**

井上専務は、フレディアエコワイドの長所・特徴として、パンチの精度が高いことをあげている。フレディアエコワイドには、印刷機メーカーの基準に合ったパンチを3種類まで搭載可能で、出力後はそのまま印刷機にセットできるメリットがある。製版工程でのポトルネック解消に貢献し、露光処理とパンチングを同時に行うため、見当精度が格段にアップする。導入前の三共印刷所では、一回の版替えごとに見当合わせの作業時間が現在の倍以上かかっていたため、「時間・作業工程の面で効率化を図ることができた」と専務は語る。

また、フレディアエコワイドは2種類のサイズの感光材料をセットできるため、菊4・A3縦を自動で切り替えて出力が可能となっ

三共印刷所は、古くからダイヤモンドのユーザーであり、フレディアエコワイドの導入は2013年12月のことだった。同時期にTDP459も導入。理由は旧機種での入れ替えのためで、カラー印刷のニーズが増えたことによる。オフセット印刷機としてリヨビの524XXが稼働している。

主にTDPを封筒の印刷に用いており、より細かい部分での使い分けとしては、菊4サイズをフレディアで、A3縦単色をTDPで行う形となっている。



いる。また、一般的なCTPと比べてオートローダーと自動現像機が一体となっているため、取り扱いがしやすく省スペースにも貢献している。廃液の問題についても、塗布タイプとなっているので、いわゆる「ジャブ漬け」にならず、処分の手間が省けるうえ、コストも抑えられると好評だ。

TDPについても「トナーもインクも使わず廃棄物ゼロ、完全プロセス」でメンテナンスに手間がかからない。コピー機感覚で簡単に扱える」と専務は高く評価している。長く使い続けているが、故障・トラブルもほとんどないと話す。



三共印刷所では卓上・小型レーザーUniversal Systems Laser Systems社の「VLS3.50」も導入しており、大喜利印刷の企画に参加する際にも活用している。大喜利印刷というのは、ツイッターで誰かがつぶやいたものをお題にして、印刷屋で考えられるものをつぶやいた人に答えとして返す企画のことだ。

**新しい試みと
大喜利印刷**

大喜利印刷は、全日本印刷工業組合連合会が組織した、実験的クリエイティブユニット「CMYK」によって構成されている。企画自体がスタートしたのは2018年で、ペーパーレス化が進む現代において、印刷業界がだんだんと衰退に向かっていることもあり、面白く印刷業界を盛り上げられればよいとの考えで行われている。

過去には、アメリカで業界人向けの見本市的なイベントとなっていた「SXSW（サウス・バイ・サウスウエスト）」への出展実績もあり、2020年はミラノでのイベント出展を予定していたが、新型コロナウイルスの影響で残念ながらなくなってしまった。

アイデアの料金は「5円（ご縁）」と掛詞になっており、公式サイトでは他社のアイデアも多数紹介されている。企画への参加そのものではないが、メディアへの露出例もあり、それをきっかけとした受注・求人への応募なども生まれている。

りカレンダーを日々切り抜いていき、毎日台紙に貼り続けることで大きな蝶々ができあがるというもの。

専務は「余り紙には色々な種類があるため、白色でも一つ一つ手触りが違い、切り抜いたものはそのままメモ書きやしおりなどに再利用できる。一日ちよつとした作業を行うことで、いつの間にか目的ができて、何気ない日常が楽しみになってくれれば」と狙いを話す。

「通常の依頼であれば商業的なものを作るが、企画として一つのものを作るのはまた違った面白さがある。他の印刷会社で作ったもの・アイデアを見られるというのも面白い。」

実は、井上貴寛社長が全国青年印刷人協議会 議長指名副議長という立場のため、横のつながりからアイデアの集約・共有・提案・紹介へと進めようとする動きもあるようだ。

印刷業が盛況だった時代から、次第に業界全体の規模が小さくなってきている。昨今印刷業自体は「なくならないもの」の確実に縮小傾向にある。ある意味では、そこをどうやって面白くできるのかを探っている状況だ。」と専務は語る。

ハンコレス・ペーパーレス化の流れの中で、自社にできない他社にはできないという方向性として、三共印刷所は「手間がかかるもの・小ロットのものであっても、短期間で納品できる体制

その中で、三共印刷所が挑戦したお題は「毎日、やること無い」というつぶやき。お題への回答として、余った紙を使って作られた「ひまつぶしカレンダー」は、蝶々型の切り抜きがある日めく



「これからお店を始めようと考えている人は、基本的に大きい仕事は依頼しないことが多い。大量には必要としないが、他と違うデザインのものが欲しいというニーズに応えられるようになれば、差別化につながる。」

三共印刷所が小ロットへの対応を重視しているのは、利益・生き残りかけた判断だけが理由ではない。そこには、3代続く三共印刷所の歴史を支えてくれている、商店さんとの取引を大事にしたいという強い信念があるのだ。

「これをどうと考えると、三共印刷所と比べて、状況は改善するために手も打った。抗菌用紙を使って名刺を作る提案を行ったところ、「思った以上に変わってくれる顧客が多かった」ため、今後のトレンドになると考えている。用紙を替えるだけで作成でき、専用のインクも不要となるため、手間もかからない。他には、ホテルの宴会場・テーブルなどに置かれることを想定した使い捨てマスクケースを、2・3点ほどオリジナルで作成した。コロナ禍で注目を集める商品「抗菌プラスにおむつインキ」のデザインのみを依頼されたこともある。

「これからは、三共印刷所と比べて、状況は改善するために手も打った。抗菌用紙を使って名刺を作る提案を行ったところ、「思った以上に変わってくれる顧客が多かった」ため、今後のトレンドになると考えている。用紙を替えるだけで作成でき、専用のインクも不要となるため、手間もかからない。他には、ホテルの宴会場・テーブルなどに置かれることを想定した使い捨てマスクケースを、2・3点ほどオリジナルで作成した。コロナ禍で注目を集める商品「抗菌プラスにおむつインキ」のデザインのみを依頼されたこともある。」

「これからは、三共印刷所と比べて、状況は改善するために手も打った。抗菌用紙を使って名刺を作る提案を行ったところ、「思った以上に変わってくれる顧客が多かった」ため、今後のトレンドになると考えている。用紙を替えるだけで作成でき、専用のインクも不要となるため、手間もかからない。他には、ホテルの宴会場・テーブルなどに置かれることを想定した使い捨てマスクケースを、2・3点ほどオリジナルで作成した。コロナ禍で注目を集める商品「抗菌プラスにおむつインキ」のデザインのみを依頼されたこともある。」

「これからは、三共印刷所と比べて、状況は改善するために手も打った。抗菌用紙を使って名刺を作る提案を行ったところ、「思った以上に変わってくれる顧客が多かった」ため、今後のトレンドになると考えている。用紙を替えるだけで作成でき、専用のインクも不要となるため、手間もかからない。他には、ホテルの宴会場・テーブルなどに置かれることを想定した使い捨てマスクケースを、2・3点ほどオリジナルで作成した。コロナ禍で注目を集める商品「抗菌プラスにおむつインキ」のデザインのみを依頼されたこともある。」

「これからは、三共印刷所と比べて、状況は改善するために手も打った。抗菌用紙を使って名刺を作る提案を行ったところ、「思った以上に変わってくれる顧客が多かった」ため、今後のトレンドになると考えている。用紙を替えるだけで作成でき、専用のインクも不要となるため、手間もかからない。他には、ホテルの宴会場・テーブルなどに置かれることを想定した使い捨てマスクケースを、2・3点ほどオリジナルで作成した。コロナ禍で注目を集める商品「抗菌プラスにおむつインキ」のデザインのみを依頼されたこともある。」

「これからは、三共印刷所と比べて、状況は改善するために手も打った。抗菌用紙を使って名刺を作る提案を行ったところ、「思った以上に変わってくれる顧客が多かった」ため、今後のトレンドになると考えている。用紙を替えるだけで作成でき、専用のインクも不要となるため、手間もかからない。他には、ホテルの宴会場・テーブルなどに置かれることを想定した使い捨てマスクケースを、2・3点ほどオリジナルで作成した。コロナ禍で注目を集める商品「抗菌プラスにおむつインキ」のデザインのみを依頼されたこともある。」

「これからは、三共印刷所と比べて、状況は改善するために手も打った。抗菌用紙を使って名刺を作る提案を行ったところ、「思った以上に変わってくれる顧客が多かった」ため、今後のトレンドになると考えている。用紙を替えるだけで作成でき、専用のインクも不要となるため、手間もかからない。他には、ホテルの宴会場・テーブルなどに置かれることを想定した使い捨てマスクケースを、2・3点ほどオリジナルで作成した。コロナ禍で注目を集める商品「抗菌プラスにおむつインキ」のデザインのみを依頼されたこともある。」

「これからは、三共印刷所と比べて、状況は改善するために手も打った。抗菌用紙を使って名刺を作る提案を行ったところ、「思った以上に変わってくれる顧客が多かった」ため、今後のトレンドになると考えている。用紙を替えるだけで作成でき、専用のインクも不要となるため、手間もかからない。他には、ホテルの宴会場・テーブルなどに置かれることを想定した使い捨てマスクケースを、2・3点ほどオリジナルで作成した。コロナ禍で注目を集める商品「抗菌プラスにおむつインキ」のデザインのみを依頼されたこともある。」

「これからは、三共印刷所と比べて、状況は改善するために手も打った。抗菌用紙を使って名刺を作る提案を行ったところ、「思った以上に変わってくれる顧客が多かった」ため、今後のトレンドになると考えている。用紙を替えるだけで作成でき、専用のインクも不要となるため、手間もかからない。他には、ホテルの宴会場・テーブルなどに置かれることを想定した使い捨てマスクケースを、2・3点ほどオリジナルで作成した。コロナ禍で注目を集める商品「抗菌プラスにおむつインキ」のデザインのみを依頼されたこともある。」

有限会社三共印刷所 Company Profile

代表者：井上 貴寛
〒960-8018
福島県福島市松木町 1-30
TEL: 024-525-4220
FAX: 024-525-4221

<https://www.facebook.com/sankyoprintfactory/>

「これからは、三共印刷所と比べて、状況は改善するために手も打った。抗菌用紙を使って名刺を作る提案を行ったところ、「思った以上に変わってくれる顧客が多かった」ため、今後のトレンドになると考えている。用紙を替えるだけで作成でき、専用のインクも不要となるため、手間もかからない。他には、ホテルの宴会場・テーブルなどに置かれることを想定した使い捨てマスクケースを、2・3点ほどオリジナルで作成した。コロナ禍で注目を集める商品「抗菌プラスにおむつインキ」のデザインのみを依頼されたこともある。」



井上専務

ユーザー会社レポート



公共性と革新性を両立する 中日新聞印刷の戦略とは

中日新聞印刷
岐阜県岐阜市

新聞用完全無処理CTPプレート: 三菱製紙 PD-News RECTA Ver2
刷版情報印字システム: Miyell

「新聞」というブランドを最大限に活かす

中日新聞印刷は、2009年6月1日、中日岐阜オフレット、シー・ピー・エス、中日プリンタリの3社合併により生まれた、資本金5,000万円・中日新聞社100%出資の新聞印刷会社である。名古屋北区辻町に本社を構え、辻町北・岐阜・東濃・大府で4工場が稼働しており、愛知・岐阜・三重・長野・福井・滋賀の6県に向けて中日新聞・中日スポーツを印刷している。4工場では、中部管内の中日新聞朝刊を150万部以上印刷しており、中日グループ内での印刷シェアは76%と、まさに中日新聞社の根幹を支えている。

後、30年以上にわたり稼働を続けている。岐阜工場における刷版の製版枚数は、中日グループの中でも特に多く、1日あたりおよそ900枚に及ぶ。

中日新聞印刷の社員の絆は深く、特に印刷部員の強い団結力が感じられた。2020年2月から進めた新聞印刷において極めて重要な刷版工程の無処理化への更新は、新型コロナウイルスの影響を受けたながらもスタートであった。現場において、コロナ対策を行う事で様々な制約がある中、3月の大府新工場の立ち上げも重なるなど、非常にタフな環境を乗り越えている。また、東濃工場は無災害記録7,000日を超えており、「東海エリアで一番多く読まれている新聞を作ること」への誇りを、社員全員で共有していることがうかがえる。

10万インプレッション以上の耐刷性を誇る PD-News RECTA Ver2 導入の経緯

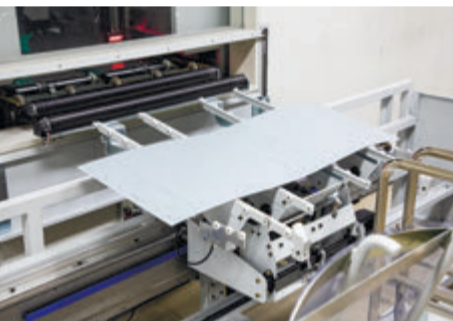
中日新聞印刷が導入している新聞用CTPプレート「PD-News RECTA Ver2」は、新聞印刷における高速・大部数印刷に対応し、現像処理工程を不要とした合紙レス完全無処理CTPプレートである。現像、ガム液の薬品、廃液がなくなり、環境負荷低減にも大いに貢献している。耐刷性は10万インプレッション以上と、超高速・高品質印刷が要求される新聞印刷の現場で大きな武器となっている。

三菱製紙製CTPプレートの採用は、2016年にさかのぼる。まず、有処理タイプの版である「PD-News Ver5」が導入された。4年後の2020年4月には、NEC製CTP4台を無処理版仕様へ更新した際、複数社の製品を検討した上で、PD-News RECTA Ver2が採用となった。

テストは2019年に2度行っており、現場でも無処理版を歓迎する声が強かった。最初はサンデー版でのテストとなり、45万部という部数を刷るロングラン印刷に耐えられるかどうかを焦点となしたが、十分な耐刷力と評価された。



岐阜工場の細江工場長は、無処理版のメリットについて「処理液交換のときに処理部を清掃するが、細かい部分にカスが溜まるので、作業は一日仕事。それがなくなっただけで清掃にかかる時間が大幅に軽減された。それまで1ヶ月に1回はまとまったメンテナンスが必要だったが、無処理版に移行してからは半年に1回のスパンになった。廃液処理や各種手続きの手間も省け、コストも大幅に減少している。洗浄を気にすることがないのでスペースも有効活用できるようになった。」と語る。

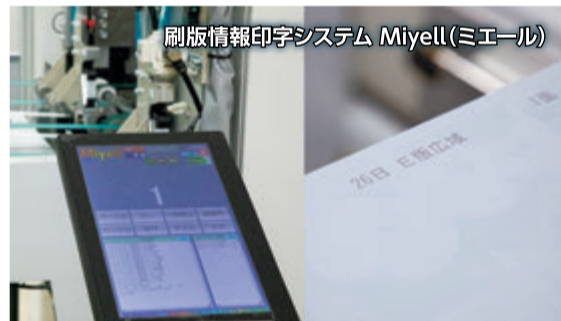


中日新聞グループ全体でも無処理版への移行が進み、2020年9月にはグループすべての工場が完全無処理に移行。複数の印刷工場を有する数ある新聞社の中で、最も早く無処理化したケースとなる。もともと設備投資の更新は簡単なものではない上、新型コロナウイルスが追い打ちをかける中、中日新聞グループは将来を見据えた先進的な取り組みを進めている。

ニーズを支える 刷版情報印字システムとインクジェット印刷機

無処理版は多数のメリットを持つ反面、視認性が劣る傾向にある。そのため、中日

新聞印刷ではシステムック社製の刷版情報印字システム「Miyell(ミエール)」を導入・運用している。「Miyell」導入前は、有処理版の時代から別の印字装置を使っていたが、トラブルが多かったことから切り替えの経緯がある。



刷版情報印字システム Miyell(ミエール)

岐阜工場印刷部の奥川主任は「導入は無処理版への移行を見据えて行ってきた。トラブルが多かった前機と違い、週1でメンテナンスを行っていただければ問題なく稼働してくれる。導入を決めた当時から『問題ない』と判断した通り、印字の欠け・データの不れなど、気になる部分はすべてクリアしている。」と太鼓判を押す。



岐阜工場印刷部 奥川主任

また、他の設備として、本紙でもお世話になっているパリアブル印刷が可能なインクジェット方式のデジタル印刷機「JETLEADER」

も、中日新聞本社工場に設置されている。



インクジェット方式 デジタル印刷機 JETLEADER

導入時に、印刷現場の責任者であった細江工場長は「輪転機の強みとも言える折り装置・フレーム強度は文句なし。JETLEADERに決めて良かったと思う。北陸の旅館特集・映画PRなど、新聞スタイルでは難しいタイプアップもタプロイドで実現できた。映画PRでは、試写会に父母を招待して、パリアブル印刷のみ可能な個人の名前入りの感謝の言葉や載せた冊子をシートに置く演出を行い、非常に感激したとの声をいただいた。子供向けカレンダーの印刷、町内のイベント向け印刷物なども行った。」と性能・実績を評価している。

「新聞」という文化を コロナ禍でも 継承し続ける

コロナ禍における商業的ダメージは、世情を報じる新聞社においても例外ではなかった。新聞の部数と直接関係する要因ではないものの、チラシ広告の落ち込みは激しく、出稿される広告量も減少した。

しかし、中日新聞グループは、本来の公共性にもとづいた新聞社の役割を担うべく、コロナ禍では特集を2回行っている。1回目の特集で



中日新聞印刷 岐阜工場

は、手作りマスクの作り方や新しい生活スタイルなど基本的な情報を、2回目は第2波の収束時にさらなる防止策を伝えた。「新聞が持つ公共性を最大限に活かしたい、いち早く手を打てた。」と細江工場長は話す。



岐阜工場 細江工場長

「Web上の情報は、すぐに確認できる反面記憶には残りづらい。震災・災害が起こった時は、読み返しも保存もできる新聞が頼りにされる。毎朝どの家にも朝刊が届くというのは、日本で長年培われた文化の一つ。現代でレコード・アナログテープ人気が持ち直したように、紙

に印刷されたものを『贅沢品』として再評価する向きもある。」

一方、業界の保守性を懸念している部分もあり、発行する地域や読者の年代に合わせた紙面作りなど、攻める姿勢を忘れない。取材を通して、中日新聞グループは、新聞社の新たな形を体現している最中なのだという印象を受けた。



ダイヤモンドのご紹介

大改革!

ダイヤモンドの新たな挑戦



谷本 社長

三菱製紙が2020年6月25日付で組織変更・印刷感事業を再編したことに伴い、ダイヤモンド株式会社は存続会社として「三菱製紙グループ」と「株式会社ピクトリコ」と「株式会社ピクトリコ」を吸収・合併した。デジタル情報社会の進展に伴い、市場縮小に伴う販売の減少は避けられず、印刷業界全体で大きな再編が求められている中、事業の改善・経営の長期安定化を目的として行われた今回の改革は、想像を超える大改革となった。

合併というダイナミックな動きの背景には、印刷感事業の重複・共通業務の効率化、国内事業の維持、アジア地域での事業拡大を軸に、総合的な面での事業安定を図る狙いがある。

また、合併に伴うメリットを活かすべく、インクジェット事業については、プロ・ハイアマチュアを対象として、高級フォト用紙・写真出力事業で培ったピクトリコブランドの充実と尽力、ブルー・製版・ポスターなどの分野については相互に協力することで、全体の販売拡大を図る方針を固めた。

ダイヤモンド株式会社代表取締役の谷本社長は「再編という形で大枠が決まったのは6月だが、合併を想定した動き自体はそれ以前から少しずつ始まっていた」と話す。

各分野への展開と今後の展望

製紙業界の厳しさは、そのまま印刷業界にもしわ寄せが来る。ダイヤモンドもそれを見据えて戦略を立てており、これから拡大する東南アジア市場に目を向けており、昨年には、ベトナム事務所を立ち上げている。

その一例として、アパレル商品タグとコルゲート（段ボール）のフレキシ印刷があり、紙媒体への印刷以外のニーズに焦点を当てた形だ。アジア特化に加えて合併によって新たなテリトリーとなった欧米市場のCTPシステム販売の確保と拡販強化を進める方針は崩さない。

国内ではテキスタイルプリンティングの稼働を本格化させ、スポーツアパレルの製造を行う。新たな製造拠点には、繊維産業の本場の一つ、イタリアで用いられているブランド「モンテイル」の転写機を設備した。テキスタイルプリンティングのノウハウ蓄積と、ノウハウ蓄積に伴う機材販売を新規事業として立ち上げる。また、そのノウハウをもって、東南アジアへテキスタイルプリンティングの拡大を図る考えだ。

その他、サイネージの分野ではインクジェットメディア・サイネージシステムの販売拡大を目指すことも

に、新分野として三菱製紙京都R&Dセンターの医療商材を取り扱うことで医療専門商社と協業し、新規事業の拡大を図る。

谷本社長は「信用・信頼があつてこそ、お客様との取引が成立し商売ができる。事業として収益を出し続けるためには、目的に向かって突き進む強い「意思」と商売における「信頼」という根本原理を社員一人ひとりが肝に銘じておかなければならない」と、将来への展望を語っている。

ピクトリコの覚悟と未来

ダイヤモンドの大改革を語る上で外せないのは、合併した株式会社ピクトリコの存在だ。ブランドイメージも強く重要な分野の一つであるフォト分野では、ピクトリコブランドを軸として、プロ・ハイアマチュアを対象として販路を拡大しつつ、ネットプリント・プロマイド・学校写真分野への拡大や作品制作事業のプリント工房の強化を図る構えだ。



清藤 常務

株式会社ピクトリコ元代表・現取締役常務執行役員の清藤ピクトリコは「合併と聞いた時は『いよいよか』という気持ちになった。未来を見据えた時、三菱製紙グループの中で似たような商品を持つている会社があれば、いずれは一緒になつて、シナジー効果を求められるようになる」と考えていた。販売チャネルの増加・物流の合理化・商品力のアップなど、合併によって得られるメリットは大きいと感じている。ブランドイメージの保持のため、従業員のモチベーションにも働きかけていきたい」と、合併の影響をポジティブにとらえている。

経営陣も営業実績を出す「聖域なき」営業体制の強化

合併を想定する前から、自社の弱点を熟知していた谷本社長にとって、合併は必然の動きという感覚があつた。無駄を省き営業体制を強化していくことは目下の課題であり、その解決策の一つとして合併という選択があつた。

新体制を見据え、新たな協調関係を結んだり、自社や合併会社の強みを合わせ合理化したりと、活発に動いていった。

谷本社長は「社長・常務・支店長関係なく、全員が営業として動く形になる。プレイングマネージャーという形ではあるものの、単純に部下が成果を出しているかどうかをチェックするポジションではなく、見るだけの仕事を会社への功績としては評価しない。担当という形で顧客を持つことはしないが、自分の担当分野に関しては責任を持つてもらう。もちろん、社長である私も責任を担う。上役も自分で動いて、自分で考えて、自分で売上を上げる、これが今回の大改革の柱になる。」と決意を語る。

株式会社ピクトリコ元代表・現取締役常務執行役員の清藤ピクトリコは「合併と聞いた時は『いよいよか』という気持ちになった。未来を見据えた時、三菱製紙グループの中で似たような商品を持つている会社があれば、いずれは一緒になつて、シナジー効果を求められるようになる」と考えていた。販売チャネルの増加・物流の合理化・商品力のアップなど、合併によって得られるメリットは大きいと感じている。ブランドイメージの保持のため、従業員のモチベーションにも働きかけていきたい」と、合併の影響をポジティブにとらえている。

正確無比な印刷物生産をバックアップする印刷紙面検査装置

印刷会社に
とって
不良品の流出は
最大のミス

「クライアントが重要視する点は何か？」を考えた時、きめ細やかな対応、短納期、価格など様々な要素が頭に浮かぶが、結局は「お客様と約束した通りにミス無く印刷物を生産する」とことに尽きるのではないだろうか。もちろんミスの排除は利益の向上にも直結する。

そこで人気を呼んでいるのが印刷物検査システムだ。タイプ印刷機上に搭載したカメラを活用して全数検査を行なうインラインタイプ、もうひとつはオフラインタイプと呼ばれるもので、専用のスキヤナーやカメラで印刷物や刷版などを読み取るタイプだ。

コストパフォーマンスに優れ、品質安定化に威力発揮

印刷現場において現実的で使い勝手の良い製品検査として、ダイヤモンドは以下のようなメリットがあるオフライン検査機を提案する。

検知が難しいわずかな不良も安定して検出可能

インラインでは高速排出される印刷物の詳細まで完璧にチェックすることが

難しいが、オフラインであれば高精度に検出が可能で、単体利用はもちろん、インライン検査機を補完するダブルチェックにも有益だ。

全ての印刷機に対応

インライン検査機は保有する全印刷機に搭載しないと意味を成さないことから投資額が過大になりがちだ。また、メーカーや機種によってはそもそも搭載が難しかったり、精度がまちまちだったり品質管理上の都合が生じやすいが、オフラインであれば1台の検査機を複数の印刷機で共有できるため、検査精度を標準化できコスト面でも優位だ。

インライン機は多くがデータ、刷出し印刷本紙、抜き取り印刷本紙の比較検査だが、オフライン機であればSDP・RIP等で生成したTIFFデータ対刷版、複製印刷等の二対多刷、立体成果物対枚葉印刷物などにも対応することができる。

ベストな組合せを
ご提案いたします

ニューリー
ISCAMERA
FP-1000R

日本を代表する老舗メーカーによる、信頼性に優れた国産高精度光学スキヤナーと様々な素材に適合する原稿吸着機構を搭載した、四六全判対応の検査装置。RIP済データ対紙面、印刷紙面対紙面比較検査のほか、刷版検査機能も搭載している。読み取り時の細かい調整が不要なため、特に複数サイズフォーマットの印刷機をお使いのお客様に最適、拡張性にも優れ、将来の印刷機変更や増設にも1台で対応可能だ。

印刷物比較検査装置のマイオニアが放つ、高解像度CMOSセンサーに卓越した光学特性を持つレンズを組み合わせたA3W判対応のカメラタイプ紙面検査装置。一番の特長は、1mmを超えるような厚手の原稿でも比較検査が可能なことだ。枚葉紙はもちろんのこと、現物支給のパッケージや紙袋などを再生産する場合などの印刷物比較検査に威力を発揮する。ニーズに合わせた機能の追加搭載、印刷機サイズアップへの対応など、永く使用できる拡張性も自慢だ。

プロスパー
クリエイティブ
ケンサ・フラッシュ

ニューリー
ISCAMERA FP-1000R



各社からソフトハード含め多種多様な検査支援システムが販売されています。ダイヤモンドはおお客様の業務内容に合わせたベストなご提案をいたします。

プリントサポートセンター「b-side」がリニューアル!

オリジナルTシャツ 1枚から制作します!



ダイヤモンド情報メディア営業部b-sideグループは、兵庫県内にてテキスタイルプリントの受注業務を行っています。

主に大型インクジェットプリンターとmontantonio社の大型連続転写機「93SP」との組合せでロールタイプ広幅のナイロンや綿生地に熱圧捺染及び昇華転写出力を行っています。なお、三菱製紙の熱圧捺染インクジェット用紙は紙に印字するため、高精細な捺染出力が可能で生地への前処理は不要となり洗浄での排水が少なく済む等のメリットがあります。

その他、完全ドライプロセスの三菱製紙Screen Meister MD360にてデジタル製版した版を用いてのシルクスクリーン印刷ブラザーGTXでのインクジェット方式及びOKI VINCIIでのトナー転写での布へのプリント等、b-sideグループではテキスタイルプリントに係る一連の設備を導入してお客様からのご要望にお応えしています。ロール生地へのプリントをはじめ、Tシャツやポロシャツ及びトートバッグ等のプリントも受け付けていますのでお気軽にお問い合わせ下さるようお願いいたします。